

## 「二つの文化」論争

山 本 和 平

### 1

一九五九年五月、かつて自然科学を専攻した小説家 C・P・スノウ (Sir Charles Percy Snow, 1905—) がケムブリッジ大学で行なったリード講演『二つの文化と科学革命』(*The Two Cultures and the Scientific Revolution*) を契機として展開されたイギリス現代文化論は、近來稀にみるにぎにぎしい論議であった。この講演をめぐって、学問・芸術さまざまの分野から知名の士が発言したし、「知識人のパーティでお客たちが、敵意の牙を研ぎ、非難の共同戦線をはるのにスノウという名ほど恰好なものはなかった」ほどだったらしい。

論議が一応の収束をみた一九六三年の十月、スノウは

『タイムズ文芸附録』に『二つの文化再考』(*The Two Cultures: A Second Look*) なる長い論文を寄稿し、論議の問題点の整理と反批判、自己の見解の修正と補強を行った。

本稿では以上二つのスノウ論文と、スノウの講演の三年ほど後に、おなじくケムブリッジ大学で行なわれた F・R・リーヴィス (Frank Raymond Leavis, 1895—) のリッチモンド講演『二つの文化だど?』— C・P・スノウの意義』(*Two Cultures? — The Significance of C. P. Snow, 1962*) を中心にして、両者にみられる現実認識の相違、「文化」観の相違とそれが意味するものを検討してみたいとおもう。特にリーヴィスをスノウ批判の代表にした理由は、それがほとんど全面的なスノウの否認で

あること、すなわち、スノウの陳述の内容に限って批評するのではなく、彼の文体、発想の様式の批評を、スノウという人格そのものの欠陥の指摘と織りあわせて行なうことによって、一種の「精神」の営みとしての、リーヴィス自身の人格がそこにみられるからである。正直に言って、私にはスノウの論文に含まれる思想的意図にはかなり同意するものの、文体の、つまり思想的洞察力、緻密さという点では同感しえないもの——比喩的にいえば、ユニークな「顔」ではなく、署名のない「背中」ばかりを見せられているようなものかしさ——を終始味わわされた。一方リーヴィスの論文にはその思想的な展望、「文化」論の構想の視野における、彼本来の頑固なまでの局限性——文学中心主義としてあらわれる——をここでも感じたけれど、その「精神」の不断の訓練に由来する立言の迫力と透徹さ——いわば「精神」の表情のきびきびした動きといったものには共感しえたのである。

2

スノウの論の趣旨は科学が人類の運命を決定する時代

に相互に伝達なき「二つの文化」、彼のいう「文学文化」と「科学文化」の分裂状態は危険であるというまことに当然の指摘と、その解決の方向として科学教育の振興、さらにヒューマニズムにたった科学革命の積極的推進をうったえたもので、その限りではこれもまた反対すべき理由はない。リーヴィスもこの点に関して特にとりたてて反論してはいない。ただスノウの発想の基盤、その立言を支えている思想の凡庸さとして現われる無責任性、無意識性、つまり思想的骨格の脆弱さを衝き、スノウの関心が不十分であることを強く指摘するわけである。

「文化」<sup>カルチャー</sup>というコトバはイギリスの思想史のなかのキー・タームのひとつであることはいまでもあるまい。リーヴィスは『大衆文明と少数文化』(一九三〇)なる小冊子を、冒頭にマッシュュー・アーノルドの『教養と無秩序』(二八六九)を引用することからはじめているが、コールリッジ・アーノルドと並ぶ線上にリーヴィスはある。レイモンド・ウイリアムズが『文化と社会』で論じているように、彼らの場合「文化」は少数者によって継承され担当されるものであるが、コールリッジにとって、少数者は「民族的遺産を授けられた一階級」、彼の名付けた

「クレリシイ」(clerisy)であり、学問・芸術の全分野の陶冶をめざし、アーノルドにあっては、少数者はあらゆる階級に属する個人により構成された余計者で、階級感情の制約を脱している点がその特徴であり、リーヴィスのばあい、少数者は本質的に文学的少数者で、文学伝統と極めて繊細な言語能力の維持をめざしている。「文化」を担当すべき少数者は次第にますます少数になると同時に、担当すべき領野がコールリッジの「全学問」からリーヴィスの、「文学」と「人間的状況の意識と生の本質の意識に影響を与える限りにおいての科学と哲学」にまで狭まってきたのは否めない。そこにスノウが、単に実際的な立場からではなく、「文化」の理論の次元で、「科学文化」を声高く叫ぼうとする理由もでてくるのである。以下、スノウの論旨を要約紹介しながら、問題点を論評してみる。

3

スノウの講演は四章よりなる。第一章二つの文化、第二章生来のラッダイトとしての知識人、第三章科学革命、第四章富者と貧者で、全体のタイトルが『二つの文

化と科学革命』である。

『二つの文化再考』(以下『再考』と略す)によると、最初考えていた演題は「富者と貧者」だったらしい。そうだったら論争もあれほど派手に行なわれなかったにちがいない。なぜなら「二つの文化」というこの複数がスノウのいう「文学文化」に属する人々を刺激したからである。

スノウはまず、昼間は大学で科学者として研究に従事し、夜は文学上の友人とすごした彼自身の経験を通して、民族、知性の程度、出身階級、収入の諸点でほぼ同一の条件にある文学的知識人と科学者の間のほとんど全面的なコミュニケーションの断絶、知的生活の両極分解といった現象の存在を指摘する。

こうした序論からわれわれが予想する論の展開は、両者の乖離、対立の本質の析出によって、和解の可能性、和解の実現方法の提示であるだろう。和解が単なる平和共存でないためには、情勢論的な、現実主義的な志向においてではなく、両者の社会的機能の相違、認識形式の相違を、本質的な次元で明確にするほかないわけで、「科学の教育をうけ、小説家を職業とする」と自ら表明して

いるスノウにそれを期待するのも当然である。「科学」を駆使する産業社会とそれに追い詰められる「詩」との相剋というイギリス近代の伝統的な文化史的主题を身をもって経験しているはずのスノウこそ最もふさわしい人間だとだれもおもうだろう。

ところが実際はそうではなく、本質論はおきざりにして、もっぱら「二つの文化」の対立という現象面を、対立を鮮明化はするけれど結果的には固定化するようになり、流れていく。たとえば両者の敵対関係の説明にあたって、論点はたちまち両者の人生観、人類の未来にたいする態度——文学者は、科学者は未来に関して樂觀的であると非難し、科学者は、文学的知識人は同胞に無関心であると非難する、というようになり移動していく。そして、それは、「文学的知識人」の保守性、科学及び「科学文化」にたいする頑迷固陋さ、同胞への態度の非人間性の強調へとつながっていくわけである。

まずおおよその論の展開を示すと、第一章は、第一にいわゆる科学者の樂觀性といわれるものの吟味、第二に科学が文化の一つなることの主張と「科学文化」の特質の規定、第三に「文学文化」と「科学文化」の対立と克

服のための科学教育強化の提案である。第二章は、生来のラッダイトとしての知識人という表題の予想させるような、イギリスの「文学文化」——これはいつのまにか「伝統文化」にすりかえられている——の徹底的な非難で、文学的知識人は産業革命・科学革命にたいしては無知、無理解であったという。ここにくるとスノウはもはや調停者の仮面をふりすてて、明らかに十九世紀・二十世紀イギリスの全文学の告発者の立場から科学擁護、産業革命・科学革命讃美の役割を演ずる。第三章は在来の教育のバタンを打破し、科学教育の徹底をはからないかぎりイギリスの未来は暗い、という憂国の情にみちた科学立国論とでもいべきものである。第四章は、科学革命によって推進される工業化こそ全人類の幸福を保証するものであり、イギリスは先進国としてヒューマニズムの立場からこれに寄与しなければならず、そのために科学教育の強化の方向に全教育体系の再編成を行なわねばならないとしている。

以上の論の展開から明らかなように、スノウの意図は極めて实际的、現実主義的な、科学振興の提言なのであり、リーヴィス流に皮肉にいえば、現代イギリスの「賢

人」としての、「予言者」としての風貌、ヒューマニズムの唯一の、直接的な実現可能な方法と信じる科学の擁護者、「科学文化」の唱道者の姿勢がここにある。

『再考』の冒頭で、リード講演の意図は、第一に教育への関心を、第二に富者の貧者にたいする関心を喚起するという点での行動の契機となること、特に後者にあつたといっている。しかしまた「二つの文化」という問題に関して、はっきりいわなかったけれど意図としてあつたことを繰返したいといつて、「科学的な知的発展の体系も、伝統的なそれも（伝統的）」というのはスノウのばあい「文学的」というに等しい）ともにわれわれの潜在的な能力（の開発）には、われわれの当面する仕事には、いまや始まろうとしているわれわれのすむべき世界のために、不十分である」といっているところをみれば、必ずしも科学一辺倒ではないらしい。しかし、『再説』においてしからば「文学文化」の機能乃至価値が説得的に展開されているかという点、ここにおいても一般的に近代文学の情況が、ルカーチに代表される反モダニズムとトリリングに代表されるモダニズムという対立の図式で示されたあと、しからばそういう文学と科学革命の關係如

何になると解答はないのである。「私は自分があるひとつの間をおこなっているのに気づく。それは修辭疑問ではない。私にその解答が解らないのだ。わかつたらさっぱりするだろう。その間とはこうである。科学革命の希望、他の人達の生活の謙虚にして困難な希望を私もともに抱きつつ、同時に、いま定義したような文学（すなわち近代＝現代文学）に無条件に参加することがどの程度可能であろうか。」これは正直な自問であろう。しかし何故に小説家C・P・スノウは自己の文学観を、あるいは文学への信念を語ることができないのか。何故に小説を書くのかをおのれの誠実さにおいて凝視しないのか。

『二つの文化と科学革命』なる講演の与える不満は、このスノウの自問が不在だったこと、すなわち科学革命の不可避性、いや緊急性と現代文学——彼自身その一翼をになつておそらく信じているところの——の存在理由との相剋の経験、その経験の分析の不在なのである。リーヴィスが「ナイーヴ」といい「無知」といい「無意識」といって口を極めてのしるのもその点である。

むしろ科学教育の振興、貧者への関心を高めることに

は反対はない。しかし正当な主張も、柔軟な感受性と緻密な反省を経ないときにはお題目に、錦の御旗に転落するほかないのである。

## 4

科学者と文学者の間のコミュニケーションの欠落について、スノウはその原因を説明するのではなくむしろ、その結果である乖離の現象をいろんな例をあげて説明する。スノウの論は、まず科学者と非科学者の相互が接触と理解を喪失している現実の指摘、次にこの喪失は不幸であり危険であること、したがってこの相互理解の亀裂に架橋する方法の発見の可能性と努力の必要性を説くという順に展開する。

相互理解の喪失の例として科学者はディッケンズが解らぬし、文学者は「質量」「加速度」がわからぬという。こうした比較はいささか危険であることは後述するが、「科学文化」という呼称の正当性、それが伝統的な「文学文化」と対等の位置をしむべきものであることについて、科学は知的にも人類学的にも一つの「文化」を構成していると断言する。

統計的にみて科学者は、非科学者に比して、宗教的には無神論的、政治的には左翼的、出身階級的には比較的貧困であり、さらに重要なことは、「彼らの仕事も情緒生活の面でも科学者達は相互にはなはだ似ており」、あえていえば「本来的に未来感覚をもっており」「特に熟考せずに反応の共通性を示す」といい、「これが文化というものだ」としている。

スノウが人類学的なイミで「文化」というのは、叙上のような科学者の風土をいうのである。(『再考』においては「共通の慣習、共通の前提、共通の生活様式によって結合され、同一の環境にすむ人々の集団」と定義されている。)

また、知的な意味の「文化」とは、ふつうの辞書にある意味で「知的発展、精神の発展」だといひ、コールリッジを引用して「われわれの人間性を特徴づけているような諸特質、諸能力の調和的發展」(『教会及び国家の制度について』第五章)という。

この意味での「文化」は単に「伝統的な」精神の発展のみならず、「科学者がその専門的な活動の過程において成就される発展にも妥当する」のであるが、両文化ともそれ自体では十分ではない。伝統的教育は、自然界へ

の好奇心、思想の象徴体系の利用——これまた人間的なものだ——を特徴とする「科学文化」の面を欠いており、科学を文化から排除する傾きがあるが、これは想像力の欠除であり、全くの無知だといって、科学を文化と認めなければならない人々に反撃を加えている。

前述したように人間性の実現としての文化が、イギリス文化論の系譜において次第に、古典を核とする文学作品へと狭隘化してきた感のある現在、スノウのこの主張は抽象的論議としては正当であるといわねばならない。しかし、そうした文化論の発展の系譜は、コールリッジの警告にあるような「文化にもとづかぬ文明」を促進した産業社会の発展に対応するものだったのであり、それへの正当防衛の側面をもつことを看過しているスノウの主張は、抽象的な点での正当性から、忽ち油断のならない楽天的科学主義へと転落する危険がたえずあるのである。

イギリス文化論の伝統への留意なしで、すなわち産業文明への批判的感受性なしで、「科学文化」を一般論としてやるのではどうしても楽天的と断ぜざるをえないわけである。たとえば「科学文化に含まれている論法はふ

つう、文学者の論法よりもきまってはるかに厳密で、ほとんど常に概念的水準においても高度である。」したがって科学者は「極めて知的な人間であり、彼らの文化は多くの点で厳しく、賞讃すべき文化である」と科学擁護者の姿勢で次に「文学的知識人」の批判にとりかかる。

(文学的知識人は)いまだに伝統的文化こそ「文化」のすべてだという顔をしたがる。まるで自然の秩序など存在せず、自然の秩序の探求はそれ自体であれその結果であれ興味がないかのような顔である。物理的世界の科学的構築物(学問体系)が、その知的深さ、複雑さ、明確さにおいて、人間精神の最も美しく素晴らしい集団的作業ではないかのような顔をしたがるくせに、たいいていの非科学者は、科学的学問体系についてはなんらの概念ももっていない。

はたして文学的知識人が実際、自然秩序の存在を否認するか、またその探求に興味がないかどうかは疑問であろう。しかしこれは単に科学教育振興論者の態度ではなく、やはり抽象の域をでないとはいえず、多少とも科学の本質にかかわる発言である。科学の論法が文学のそれに

比して概念的水準がはるかに高いこと、科学が人間精神の集団的成果であることは異論の余地はないだろう。しかし「非科学者が科学的学問体系についてなんらかの概念をもつ」とはどういうことであり、またいかにして可能であり、またいかなる意義を有するのかとなると、スノウの返答はさだかではないのである。

スノウは科学的学問体系の美しさ、素晴らしさをいうのなら、それを観念としてではなく具体的に感知せしめないかぎり、文学的知識人の不明を語るだけの印象しか残らないだろう。(I・A・リチャーズは、現代詩の貧困と結びつけて科学の魅力を語っている。『詩と科学』第五章自然の中性化を参照。)もし感知せしめることができないのなら、それはスノウが科学的学問体系の美しさを経験してないからであるか、あるいはそれを非科学者へ感知せしめることのできるほど本来それはなまやさしいものではないのかのいずれかであろう。

スノウは「科学文化」と「文学文化」の架橋を試みる姿勢で主として文学的知識人の科学音痴的な面を批判してきた。次はこのスノウの講演での引用のせいで有名になったとさえいえる「熱力学の第二法則」の場面であ

る。

私はしばしば、伝統文化の基準からみて教育ある人人の会合に出席したが、彼らは科学者たちの無知について不信を表明するのにかんりの趣味をもっていた。一、二度だったが、むかっときて彼らのうち何人が「熱力学の第二法則」の説明ができるかと訊ねた。その反応はひややかで、否定的であった。だが私がたずねたのは「あなたはシェイクスピアの作品を読んだことがあるか」というのと等価の科学の面での質問だったのである。

マイクル・ユドキン (Michael Yutkin) はこの一節にふれて(『チャールズ卿のリード講演』F・R・リーヴィスの論文と併載)「これはチャールズ卿の論法の中心的な観念である。それは科学的知識と芸術的経験とを等号で結ぶのである。こうした等式の背後にある諸価値はそれ自体奇妙なものだが、それらから結果するものは一層重大である」と批判し、科学教育の振興を叫ぶスノウの誤った教育観、教育を知識の習得とのみみる傾向、——教育のある人とは多く知っている人であり、より教育のある人



とはより多く知っている人であるというみかた——を指摘している。

またリーヴィスは科学のシェイクスピアなどという表現の奇怪さを衝き科学と文学ほど距った種類の間の等式は無意味であると一蹴している。

ところでマーチン・グリーンは「C・P・スノウの文学的擁護」なる論文(『クリティカル・クォーター』一九六二年夏季号)でリーヴィスと真向から対立しているのは立派である。もっとも彼の弁護論の中のスノウは真のスノウよりはるかに立派な、一貫した思想家としてあらわれているが。

「熱力学の第二法則は、難解な現代科学の、多くの知識の分野と関連する、鍵とでもいふべきもので、それ自体極めて鮮かな、メロドラマ的でさえある概念である。その法則の存在を知ること、一度その想像的興奮を経験することは、『マクベス』を読んだ経験と類似している。それを知らないことは、その人が巨大な思想と想像の領域から切り離されているということの明白なしるしであることは、『マクベス』を読んだことがないのと同じである。」

ユドキンが科学的知識と芸術的経験とを等号で結ぶといて批判し、リーヴィスが、科学と文学ほどはなはだしく類を異にした秩序の間の比較は無意味といて却下した等式を、グリーンは「科学的知識」ではなく、科学法則の与える「想像的興奮の経験」とみることによってスノウを弁護する。

グリーンがスノウを弁護しリーヴィスを批判する立場に立つが、それは、リーヴィス及びリーヴィス派の「文化」論にみられる文学主義の狭隘さ——「批判力は極めて鋭く、自信たるや申し分ないが、姿勢は完全にうしろ向き」——にあり、科学や社会的活動などの文学外の知的、実践的経験を信用しない態度にあることは確かだ。

ところで「科学法則が与える想像的興奮の経験」とはどんな質の経験なのだろう。「再考」でスノウは、「熱力学の第二法則」はいい質問であったと自説の主張をくりかえし、「この法則は最大の深さと普遍性をもった法則で、独自のくすんだ美をもっている。重要な科学法則がすべてそうであるようにこれも畏敬の念を喚びます。」しかし「物理学のコトバをある程度習んでいないとその理解には達しえない。この理解は共通の二〇世紀文化の

一部となるべきである」というのである。

物理学のコトバの習得が前提となるような「想像的興奮の経験」は、文学があたえる経験と質的に異なるのではなからうか。少なくともそれは一般の人間にとっての生活経験のコトバによっては到達しえない特殊な領域の経験であろう。科学法則の理解が共通の文化になるべきことはそれ自体結構だが、それはどのようにして可能であり、どのような意義を有するのか。

ユドキンがケムブリッジの生化学の研究者であるが、彼は、スノウの科学文化の共有は結局、いろんな科学的知識の獲得にすぎず、非科学者にとって価値のある科学的理解は、科学的思考の過程と方法の理解である。なぜなら科学的判断の性質、独自の形式的批判的思考の習慣こそ、科学文化の特徴であり、科学的作業をして価値ある知的活動たらしめるもの、したがって科学にきびしい研究としての価値をえるものだからである、と安易な科学文化論を批判している。

これは正当な批判である。科学的認識は人間の生活経験のまるごとを対象にするのではない。スノウとともに、科学がある特殊な、高度の概念を使用する、厳密な約

束ごとの世界であることを認めよう。そして科学がひとつの有力な人間文化であることにも異議はない。ただ、だからといって「文学文化」が知性において劣るともいいたげな口吻を見逃すことはできないだろう。リーヴイスはこの点に触れて次のように言う。文学研究の領域はキー・チームの厳密な統御をゆるさない。この事を知ればこそますますキー・チームの使用に際しては「不断の責任」を涵養する必要があるのである。そしてスノウの「文学文化」||「文学的知識人」||「伝統文化」という等式は、文学者のそれより概念のレベルが劣ることを指摘してその無意識、無責任を糾弾する。

そして「科学的学問体系が人間精神の最も美しく素晴らしい集団的作業である」というのに対して「しかし、(科学に)先行する(あるいはより重要な)協同的創造の人間の成果、科学より基本的な人間精神の作業がある。これなくしては科学的構築物(学問体系)の意気揚々たる建設も可能ではなかったであろう。すなわち、コトバをも含めて人間の世界の創造である。それは、過去において成されたものにのっかるようなわけにはいかないものである。それは現在の変化にたいする生気にみちた創造的

反応なのだ。」

ここで、「科学に先行する」あるいは「科学より重要な」(prior)協同的創造の人間の成果とは単純化して言えば「文学」の成立する世界のことである。グリーンはこの「prior」をとらえて時間的な先後ではなく価値的な優劣をリーヴィスは意味しているのではないかと疑問を呈し、もしそうならリーヴィスはやはり科学を文化の一つとして認識していないことになると言っている。

リーヴィスにとって科学は敵対とはいわぬまでも対立すべきもの、科学と文学との間の緊張関係はたえず意識されていると考えられる。「現在における変化にたいする生気にみちた創造的「反応」というような文学が与えるはずの機能への確信は、無盲目的な、それ自体無価値な科学への批判的意識にはかならない。そうした批判的意識をまえにすれば、スノウの、芸術家の知的経験の一部として科学を同化せよという提言はおよそ観念的な、楽天的な御託ときこえるにちがいない。

5

スノウにとって科学・技術は、「貧民の唯一の希望」

である。科学革命、産業革命こそ人類の三分の二を占める後進国の貧民の求めるものである。十九世紀以来の産業革命にたいして文学者は注目せず、注目したのも恐怖の叫びをあげたにすぎぬという。「科学文化の人々を別にすればヨーロッパの知識人は産業革命を理解する——いわんや承認する——努力も欲求も能力もなかった。特に文学的知識人は生来のラッダイトであった。」と。そしてスノウは「簡明な真理」とよぶものを述べる。

工業化こそ貧民の唯一の希望なのだ。私はこの「希望」という語を大ざっぱな散文的な意味でつかっている。あまりに洗練されているためこういう使い方のできない人の道徳的感受性は私にはたいして必要がないのである。結構な暮をしながら、物質的な生活水準など大した問題ではないと考えるのもいかに結構である。個人の好みとして工業化を拒絶するのも、おのぞみならウォールデンの現代版をきめこむのも大いに結構である。食糧にこと欠き、わが子の夭折を傍観し、読み書きのたのしみを軽蔑し、自分の寿命が二〇年縮まるのを承知するというのなら、私はあなたの審美的反撥を尊敬しよう。しかし、たとえ積極的でないにしろ、選択の自由のない人に、あなたと同じ選択を押しつけようとするなら、私はあなたを少しも尊敬しない。実際、彼らがどんな選択をするかわれわれは知っている。そ

の機会さえあれば、どこの国の貧民でも土地を離れて、工場がうけいれてくれさえすれば工場へ行くことは、奇妙なほど一致しているのである。

これはもはや「二つの文化」の和解をはかる人の発言ではない。しかし『再考』において繰り返かえされているように『二つの文化と科学革命』の本旨はまさにここに簡明に語られているといつてよい。思想の次元での両者の機能的差別とその独自の意義を明確にするという意図は抛棄されており、「科学」の実践的側面、社会的実効性の側面が一方的に強調されるにいたる。スノウの「科学」は錦の御旗——ヒューマニズム——を押したてて「文学文化」||「伝統文化」を蹴散らして進むのである。そうした感慨が引用した一節にみちみちているといえよう。

「科学」、「技術」は、きまって「貧民」の救済者としてあらわれる。科学—工業—貧民—ヒューマニズム—進歩という観念のセットが、確固たる信念が、有用性の強みにたった楽天主義がある。

産業革命が人間に幸福をもたらしたか否かは実に古く

からの論議のたえまない問題といつてよいだろう。史上最初の大規模な産業革命がおこなわれたイギリスで、その論議が思想史の、特に文化批評という形で、伝統をなしていることは先述のとおりである。

スノウはまことに素朴に産業革命の結果をヒューマニズムの実現とみなしているふしがあるけれど、産業革命の推進力がヒューマニズムであると考えているとしたらおよそナンセンスであろう。もしそうだとしたらあれほど激烈な反対闘争——社会的にも思想的にも——が展開されたわけではない。

産業革命によって与えられた物質的生活の向上それ自体を否定するとしたらスノウと共にナンセンスと断じてよいだろう。だが、スノウの実に楽天的な、ほとんど手ばなしの産業革命讃美と批判者への侮蔑は危険である。

問題は産業革命がもたらした諸結果——産業社会の積極面と否定面、産業革命以前の社会の所有していた積極面と否定面をどの点から評価するかにあるだろう。リヴィスは産業社会の否定面と前産業社会の積極面をほとんど強調し、スノウはその逆を強調するというわけで対立が激化するのみで和解の道はないらしくみえるのである

る。

そしてその対立は現象的には、ともに全きヒューマニティの実現を標榜しつつ、片や科学主義・物質生活第一主義、片や文学第一主義・精神主義との抗争という形をとるのである。

産業革命・科学革命は、黙過しがたい貧富の差をなくす唯一の方法、したがってヒューマンなものだというスノウの信念の強固さは、したがって彼の所説への批判はそのまま反人間的ということになりかねないだろう。

産業革命以前の社会を有機的な共同体社会として理想化する傾向をリーヴィスの「神話」として、誤れる歴史観として、厳しくしりぞけたのはウイリアムズである。

「いわゆる有機的社会から、その構成因子たる貧困、小暴虐行為、疾病、高死亡率、無知、教育の抑止等を除外することは愚かであつ危険なことである。」と言ひ、前産業社会にあつた価値は、「生活とは全体的な、連続的なものだということを教えてくれる」ところに見ている。そして、有機的共同体の崩壊としての近代産業社会の規定は、産業社会ないし都市の住人のノスタルジアであり、封建社会への愛着をとまなう中世主義の現代版であ

るときめつけている。

そしてスノウも「科学革命」の第一波としての「産業革命」とそれ以前の社会とを比較し、リーヴィス流の「有機的共同体」を、ノスタルジア、神話、虚偽、ナンセンスとしてしりぞけ「われわれの先祖は応用科学の悪しき策謀によって残忍にも追放された前産業革命のエデンについてまじめに話したいとおもうものはだれもいはいはずだ」といっている。

この限りではスノウの説は正しいけれど、それがそのままほとんど全面的な産業・科学革命の肯定になり、したがってイギリス「文化」論及び彼のいう「伝統文化」の全面否定となり、「伝統文化」＝反ヒューマニズムとなる。ところがスノウの思想の脆弱さとして指摘される面がでてくるわけである。

たとえば『再考』において、ひとはパンのみにて生きるにあらずといった精神主義は、他者の困窮への想像力の欠除のしるしである。自分が基本的要求をもっているときそれを持たない人の基本的要求を軽蔑することは、そのひとの優れた精神性の誇示にはならぬ。それは非人間的、もっと正確にいえば、反人間的ということだとい

う。

スノウが、健康、長寿、教育などの、基本的要求とか根本的なもの<sup>ブライマンシグズ</sup>とよぶものは誰も否定しないし、また彼の「他の人間にたいする強烈な、同志的な、物質的な同情」とよぶもののヒューマニズムを認めるにはやぶさかではないであろう。ただ科学革命の強調とヒューマニズムとを安易に直結するところに問題があるのだ。リーヴィスは、スノウが、人類の三分の二を占める貧者の「基本的要求」という関心のみでは十分ではないこと、スノウの「基本的要求」の絶叫のしかたのなかに重大な精神性の欠落をみるのである。たとえばそれはスノウの次のような表現をめぐってである。

「庶民は誰でも明日のジャムの追求にはおどろくべき不屈の精神を示すことができる。今日のジャムにはあまり夢中にならないが、明日のジャムには最も崇高なところをみせる。」

この表現の「無神経さ」には啞然たらざるをえない。ここにはラスキンにみられる「富」<sup>ウニルズ</sup>と「福」<sup>ウエルゼーイング</sup>の区別はおこなわれていない。ラスキンにとって「福祉」は、技術や科学的衛生による利便をともなった、たんに

物質的な生活水準の問題ではなかった。ところがスノウの究極的な価値基準は「生活水準」であり「生産性」なのである。「ジャム」というコトバが労働者階級の享受する繁栄と余暇の意味だとなると、「ジャム」があらわす幸福は、十分に人間的な精神によっては、よろこばしい思索の対象とはみなされないし、また受益者にとっても十分満足できるものでもない、という。「ジャム」という比喩で表現されうる程度の「幸福」の理解の浅薄さ、人間の精神にたいする枯渇した感受性にたいする批判である。

「人間的」とか「十分に人間的」とかいうコトバが、スノウもリーヴィスも共に積極的価値として措定されながら、ほとんど相対立する内容——理想的には相補的でなければならぬのに——をもってそれぞれ一方的に強調されているわけである。

ところで、スノウが「ヒューマニティ」の実現過程としてその促進を期している科学革命のひきおこす社会変化を予想しつつ、リーヴィスの「ヒューマニティ」はいかにかわりあうのか。

科学と技術の進歩が意味する人間の未来は、人類がその十分なる人間性を十分に知的に所有していなければならぬであろうほどに急激な変化の未来であり、前例なき試練と挑戦の未来であり、また由々しき結果をまねくような決定あるいは非決定のなされる未来なのだ……目下必要なこと、また今後もひきつづき必要なことは……時代の新たな挑戦に対して創造的に反応する力——経験に深く根ざした極めて人間の力である知性、この最も深い、生命的本能的のままなまじさをもっているものである。これはスノウのいう二つの文化のどちらとも無関係である。

これはリーヴィスがすでに三十年ほど前に、『大衆文明と少数文化』においてうちだした基本的態度の再確認と、そしてよく、「わが文明の特徴たる安っぽい反応の意識的搾取」にたいする人間精神の擁護の姿勢である。

しかしリーヴィスは単に受動的な防衛のみではなく積極的な提案をもっているが、これも年来の実践を通じた主張である。それは要するに文学的経験による人間性の不断の涵養、批判的感受性の活性化と高揚という観念である。

彼は「スノウのいうどちらの文化にも属さない」第三の領域とよぶ場を構想する第三の領域とは端的にいつて

文学を存在せしめる場である。それは、研究室へ持ちこんだり、指示したりできるという意味では公的ではない、また単に私的、個人的でもない領域である。たとえばある一篇の文学作品なるものに関する、ある判断は個人的なものである。しかし又別の人がそれを限定し、留保条件をつけ、又修正をする。ここにはひとつの協働的——創造的過程があつて、その過程のなかで詩は、ある客観的存在として確立されてくる。その意味で文学は、ひとつの生きた全体であり、活潑なる現在においてのみ、個人の創造的反応においてのみ生命をもちうるのであつて、そうした個人々々が、それぞれ共有しているもの——文化的共同体ないし文化的意識——を協働的に更新し存続せしめていく。そしてこの協働的——創造的過程こそ、あのわれわれを人間的たらしめる一切の属する「第三の領域」の本質を附与するものなのだ。

こうした文学主義の、人文主義の核をなす一種の精神主義——モラリズムでも、リゴリズムでもない——は、スノウへの反指定としての、あるいは補完としての意義は特に大であるといつてよい。むしろ、批判的感受性の涵養が、他の社会的な経験、民主主義的な訓練を一切排

除し、もっぱら文学のみを通してなされると考えられているわけで、こうした、いわば少数文化主義、文学主義とでもいうべきものの危険、貴族主義的権威主義、あるいは社会参加に冷淡な懷疑主義への傾斜の危険を含んでいることは確かではあるけれども。

スノウとリーヴィスの双方の関心に少なくとも表面的に欠けているのはいうまでもなく政治的展望である。スノウのヒューマニティに直結する科学革命の提唱も「政治」抜きでは、実際の提案としては無意味になるだろうし、リーヴィスは政治の無視によってエリート主義におちこむ危険があるだろう。

そういう限界は認めねばならないとしても、スノウの

提起した科学重視論が、リーヴィスの鋭い批判にみられるような、人間精神の安手な理解を混入させつつも、理論的な次元での「文化」の再定義への契機——リーヴィス流の「少数文化」主義の基本的構図の局限性を打破する契機——になったことは確かであろう。

スノウが、また性急に人類愛へと直結したために、「人間精神」とともに矮少化される結果となった「科学」を、人間文化の偉大な所産のひとつとして正當に評価することは、科学主義者スノウや文学主義者リーヴィス以外の人にまたねばならない。

(一橋大学助教授)